

担当学芸員によるコラム「本展の見どころ」

(1) 芸術家たちの裏技

収蔵作家の表現の多様性に注目し、ゆかりの作家たちを紹介します。

千葉県立美術館のコレクションの主軸を担い、近代洋画の先駆者として知られる浅井忠^{あさいちゆう} (1856-1907)。洋画のほかにも、日本画や工芸、図案など、分野の垣根を越えて数多くの芸術を生み出しました。今回は、主に農村で働く人々を描いた資料・作品に目を向けます。浅井に師事した小川千甕^{おがわせんよう} (1882-1971) もまた、師に負けず劣らず縦横無尽に洋画やデザインの道も究めました。仏画や日本画の画業が目立つ小川の貴重な油彩作品《港》をこの機会にぜひご覧ください。

油彩画や水彩画の作品を数多く描いた坂本繁二郎^{さかもとはんじろう} (1882-1969) が、顔料に卵などを溶く手法のテンペラ画を描いていたのはご存じでしょうか。1912年、坂本は写生旅行で千葉県御宿町^{おんじゆく}を訪れました。海女の猛々しさを水彩とテンペラで表現した《海藻採りの海女》は、そのときの一枚です。

芸術家たちにとって、分野の垣根は最初から存在せず、こうした余技的要素^{*}が彼らの創作の根幹をなす重要な手掛かりになるかもしれません。または、創作の革新につながる「いざというときの一手」にもなり得るのです。



浅井忠 (図案) 《農家風俗画手塩皿》
1902-07 (明治 35-40) 年

(2) 千葉県美の隠し味

当館の主要な作品に関連した資料や完成作品では見ることのできない資料にも注目することで、板倉鼎^{いたくらかなえ}をはじめとする作家たちの新たな一面を紹介します。同時に水彩画のコレクションや、香取秀真^{かとりほつま} (1874-1954)、津田信夫^{つだしのぶ} (1875-1946) の金工作品、書など、隠れた名品を一堂に展示します。

本展は千葉県松戸市ゆかりの画家・板倉鼎^{いたくらかなえ} (1901-1929) の油彩画を展示すると同時に、小品やエスキース、銅版画、没後直後の遺作展のポスターに至るまで、板倉にまつわる資料群を展覧できる貴重な機会となります。板倉と交流のあった画家たちの作品も紹介します。

日本のシュルレアリスムの代表的な画家である古賀春江^{こがはるえ} (1895-1933) にとって、水彩画は自身の美学を貫く重要な役割を果たしました。1913年、日本水彩画会研究所に入り、終生、画会に水彩画の出品を続けた古賀の水彩画《風景》も見どころの一つです。



板倉鼎 《金魚》1928 (昭和 3) 年



板倉鼎 《金魚鉢のある静物》1928 (昭和 3) 年



古賀春江 《風景》1925 (大正 14) 年頃

※余技的要素：専門以外の技や芸として身に付けた技術や才能のこと。個人の興味や専門外の分野での楽しみを反映しており、重要な役割を果たします。